



ブラジル特報



特集

トランプ時代の通商外交・貿易

- ・ テメル政権の通商外交政策
- ・ ブラジル貿易における真のボトルネック

あの町この町
マセイオ



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。
オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

[Business innovation-2]

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

[Business innovation-3]

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。
オンライン教育事業のゲーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

(あの町この町)
マセイオ [片岡万枝] 3

(ブラジル・ナウ)
シャペコエンセ物語
「奇跡のクラブ」、悲劇、そして見事な吊い合戦
[沢田啓明] 5

【特集】トランプ時代の通商外交・貿易
テメル政権の通商外交政策
[二宮康史] 6

【特集】トランプ時代の通商外交・貿易
ブラジル貿易における真のボトルネック
[村田俊典] 8

BRASIL E JAPÃO UMA PARCERIA DE SUCESSO!
ブラジルと日本のパートナーシップ [西森ルイス弘志] ... 10

在ベレン領事事務所勤務を終えて
管轄地域とそのポテンシャルティエー [小林雅彦] 11

連載・ブラジル現地報告
「Japães」というチョッと悲しい現実 [深沢正雪] 12

(日系企業シリーズ・第47回)
ブラジル・パイロットペン
事業開始から63年 更なるチャレンジへ [村松正美] 13

(ビジネス法務の肝)
ブラジルの司法制度と知的財産制度の問題
[ホベルト・カラベト] 14

連載★税務の勘どころ
ブラジル個人所得税の留意点(その2) [都築慎一] 15

(連載エッセイ)
母国にして異国~ブラジルでの自主研修から学んだこと
[照屋エイジ] 16

(ウーマン・アイ)
勝負強さ [佐野仁美] 17

(ジャーナリストの旅路)
同じ「ポルトガル語圏」 [長村勝彦] 17

(連載文化評論)
アントニオ・カンディド
ブラジルの価値を批判的に評価した知識人の死 [岸和田仁] 18

コヘア大使、ブリツカー賞審査委員に任命：ブラジル人では初の快挙・・・ 19

最近のブラジル政治経済事情 19

新刊書紹介 20

(びっくり豆知識) 国家にとって「最適人口」とは 20

協会からのお知らせ 21



写真家田中克佳の「表紙のひとこと」
「ブラジルを代表するカクテル、カイベリーニャ。サトウキビを原料としたカシャッサという蒸留酒をベースに、ライムを加えた爽やかな味わい。ストロベリーやパッションフルーツ、アップル風味など多様なバリエーションも人気だ」
(65年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

あの町、この町

マセイオ

ノルデスチ(東北伯)、アラゴアス州の州都、マセイオは、ポンタヴェルジなどのコバルトブルーの美しいビーチが広がるブラジル有数のリゾート地で、ブラジル人の優しさ、人懐っこさ、暖かさが凝縮された街である。

もともと砂糖のプランテーションで発展し、現在は、ココナツプランテーションや観光が重要な産業である。人口は、100万人ぐらいの小さな町であるが、サンパウロやリオ等の都市部からの観光客の流入で、実際の滞在人口はもっと多い。滞在していた2013年頃、マセイオは世界で3番目に危険な街と報道された。



観光客の多いビーチ沿いは、夜でも皆が歩いたり、ジョギングしたりし、サンパウロやリオの方が余程危険だと思いが、人口当たりの犯罪率ではどうしてもそのような高さになってしまう。

アラゴアス州には、日系移民はほとんど入植しておらず、町を歩いていると最近交流を深めている中国人に間違えられる事の方が多かった。

週末は、Banda Militar(軍の音楽バンド)が演奏するダンス会場が、ビーチ沿いに設置され、観光客も現地の人も、皆一緒に踊る。昔は、このようなダンス会があちこちの町で週末繰り広げられていたようであるが、今は、田舎の方にだけこのような習慣が残っているようである。

ブラジルの初代大統領がアラゴアス州から出ており、都市部程政治家が変わらないということもあり、何代にもわたり政治家を輩出している一族もいてこの地域で力を持つ。ブラジルでは、所得の南北格差がよく問題になる。都会の人が、ノルデスチーノ(東北人)のことをあまり働かないとかばかにする事が、ノルデスチーノの癪にさわる。そんなにバカにするけれども、あなた達毎年遊びにきているではないか、という意味から「私は、あなたが毎年過ごしている街から来ました」という文字を印刷したTシャツを着て、少しウイットの効いた反撃が行われていた。

やるせない社会構造にも、ケセラセラと笑い飛ばせるユーモアと、遅しさがある町、マセイオ。サンパウロから飛行機で3時間。年中泳げますので、是非、一度、足をのばしてみても?



片岡万枝
(PwC アドバイザリー合同会社所属)

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っていきます。



プロフェッショナル、エグゼクティブのための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス



日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9ヵ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



シャペコエンセ “奇跡”の快進撃、未曾有の悲劇、そしてクラブ再建へ

昨年11月末に起きたブラジルのサッカークラブ・シャペコエンセの飛行機墜落事故は、サッカー界のみならず世界に衝撃を与えた。南米のカップ戦であるコパ・スルアメリカーナのアトレティコ・ナシオナル(コロンビア)との決勝第1レグのためコロンビア西部メデジンへ向かう途中、チャーター機が山岳地帯へ墜落し、搭乗者77人中71人が死亡。シャペコエンセは、選手21人中19人、監督らコーチングスタッフ14人全員、会長らクラブ役員11人全員の計44人を失った(事故の原因について、コロンビア航空当局は「飛行機の燃料不足」という見解を発表した)。

シャペコエンセは、ブラジル南部サンタカタリーナ州西部にある人口21万人の商工業都市シャペコに本拠を置く中堅クラブだ。創立は1973年だが、長いこと地方の弱小クラブにすぎなかった。2009年、初めて全国リーグ4部に参戦し、すぐに昇格。2012年に3部から2部へ、そして2013年に2部から1部へ到達し、「わずか5年で4部から1部まで駆け上がった奇跡のクラブ」として有名になった。さらに、昨年、コパ・スルアメリカーナでアルゼンチンの強豪クラブなどを撃破して決勝へたどり着き、市全体がお祭り騒ぎとなっていた。「クラブ史上最高の瞬間を迎えようとしていたまさにそのとき、思いもよらぬ悲劇が起きた」(クラブ関係者)のである。南米サッカー連盟は、コパ・スルアメリカーナ決勝の中止を発表した。

12月3日、犠牲者の遺体がシャペコへ帰還し、ホームスタジアムで合同葬が行なわれた。豪雨の中、スタジアムを埋めた2万人のファンが、老いも若きも男も女も、号泣しながら「チャンピオンが帰ってきた!」と叫び続けた(私も現地取材をしたのだが、このとき目撃した悲痛な情景を一生忘れないだろう)。

「奇跡のクラブ」を襲った悲劇は、世界中のサッカー関係者の同情を集めた。コパ・スルアメリカーナ決勝で対戦するはずだったアトレティコ・ナシオナルの選手たちは、「この大会のタイトルを彼らに与えるべきだ」と主張し、これを受けて南米サッカー連盟はシャペコエンセを優勝チームと認定した。また、国内外の多くのクラブが選手を無償で貸し出すなどの援助を申し出た。

シャペコエンセは、遠征に参加しなかった役員で新首脳陣を編成し、強化部を新たに立ち上げ、新監督を招聘。25選手を獲得し、「クラブとチームを並行して再建する」という世界のスポーツ史上でも例のない挑戦に乗り出した。

1月末に新シーズンが始まり、州選手権(前後期制)で当初は連携不足で不調だったが、次第に歯車が噛み合い始め、後期を制覇。優勝決定戦を経て、2年連続6度目の優勝を達成した。

南米クラブ王者の座を争うコパ・リベルタドーレスの一次リーグ(4チームがホーム&アウェーの総当たりで対戦し、上位2チームが決勝トーナメントへ進出する)では、第4節を終えて1勝1分2敗と苦戦。第5節のアウェーのラヌス(アルゼンチン)戦で引き分け以下なら敗退が決まるところだったが、試合終了直前に決勝点をもぎ取った。ところが、その後、シャペコエンセが出場停止処分を受けていた選手を出場させたとして勝ち点3を剥奪されてしまう。それでも、最終節で苦しみながらも逆転勝ちを収めてグループ3位となり、コパ・スルアメリカーナに回る権利を手にした。

5月中旬に開幕したブラジル全国リーグでは、初戦で強豪コリンチャンスとアウェーで引き分け、昨年の覇者パルメイラス、同州の宿敵アヴァイにホームで快勝。第3節を終えた時点で首位に立ち、ファンを狂喜させている。

予算規模が他の国内強豪クラブの数分の一以下で、高給を食むスター選手は一人もいない。しかし、誰もが懸命に走り、体を張って戦い、劣勢であろうと最後の最後まで決して諦めず、完全な負け試合を引き分けたり奇跡的な逆転勝利に結びつけたりする。選手たちからは、「クラブのために尊い命を落とした人々のためにも、絶対に負けられない」という強い気持ちを感じる。

クラブもチームもまだ再建の道半ばだが、ここまでは見事な戦いぶりを見せている。コパ・リベルタドーレスはピッチ外の失態から残念な結果となったが、全国リーグ、コパ・スルアメリカーナなど今後の試合での健闘を祈りたい。

沢田啓明(フットボール・ジャーナリスト)

テメル政権の通商外交政策



二宮康史
(ジェットロ・サンパウロ事務所 次長)

2016年5月、ルセフ大統領の弾劾手続き開始に伴い、副大統領が暫定大統領となる形でテメル政権が発足した。それまでルーラ（2003年～2010年）、ルセフ（2011年～2016年）と4期続けて労働者党（PT）政権が続いたが、その連立与党であったブラジル民主運動党（PMDB）を中心としたテメル政権に移行し、通商外交政策の方向性の転換がはかられている。

前政権の通商外交政策を批判的に捉える

ルーラ政権では、伝統的に経済的な結びつきの深い欧米、日本などの先進国から途上国に通商外交政策の比重を移し、「南南外交」に注力した。例えば中南米やアジア、アフリカ地域への外遊強化に加え、インド、南アフリカ共和国と連携した対話フォーラム（IBSA、2003年設立）の立ち上げ、中国、ロシアも加えた BRICS 首脳会合の開催（2009年以降毎年開催）など、中南米地域を基盤として域外の新興国との連携枠組みを構築した。また、通商協定では WTO を中心とした多国間交渉枠組みを重視し、途上国と連携し、先進国グループの対極となる G20 を形成した。このように積極的な通商外交姿勢は当時の途上国経済の好調も追い風となり、ブラジルを「グローバルプレイヤー」としての存在に押し上げた。

その後を引き継いだルセフ政権でも、中南米地域を基盤としつつ域外の途上国を重視する通商外交姿勢を変えることはなかったが、ルーラ時代に比べれば外遊の回数は少なく控えめな印象が強い。特に通商面では保護主義的な政策が目立った。例えば2012年3月にメキシコとの自動車協定（経済補完協定（ACE）55号）を見直し関税免除となる貿易枠を設定、現地調達率規定を改定したほか、

レアル高に対応するため特定輸入品の関税引き上げ、さらには国内産業保護色の強い産業政策を打ち出した。なお、第2期ルセフ政権以降は国内の政治、経済の混乱もあって、通商外交政策は停滞した。

テメル政権では前政権を批判的に捉え、新たな通商外交政策の構築に動いている。2016年5月に暫定政権の発足に伴い外務大臣に就任したジョゼ・セーハ上院議員（PSDB：ブラジル社会民主党）は、就任演説で10本の外交方針を示した。その第1の方針として、「（新政権において）外交は、一つの政党がもつイデオロギーやそれに沿った外国の都合を反映するのではなく、ブラジル社会の正統な価値や国民全体としてブラジルに供する経済的国益を、透明性高くかつ妥協を許さない方法で反映したものに帰する」と述べている。これは、前政権の通商外交政策において、経済的利益の面で必ずしも優先されない、ポリビアやベネズエラ、エクアドル、キューバなど左派政権との繋がりが重視されたことへの批判と捉えられる。そしてセーハ外相は第4の方針として、停滞する WTO 交渉を中心とした多国間交渉枠組みにとらわれず、二国間の自由貿易協定推進に注力することを述べている。前政権では農業問題で先進国の譲歩を引き出すため、多国間交渉枠組みを優先した経緯がある。しかし WTO 交渉は難航し大きな進展を得られず、世界的に交渉が加速する2国間通商協定に後れを取った。

中南米域内の協定の進化に向けた動き

テメル暫定政権が発足してからおよそ1年を迎えるが、通商政策は2つの方向性で進展している。まずは中南米域内での協定深化だ。ブラジルは中南米諸国と、ラテンアメリカ統合連合（ALADI）

の枠組みで経済補完協定（ACE）を締結しているが、これまでは財の貿易自由化が主要テーマであった。これをサービス分野や投資、さらには政府調達など広範な通商協定に進展させる動きがみられる。例えばペルーとの協定は、2005年に発効した ACE58 号によりブラジル側は無税に、ペルー側も96%の品目が無税となっているが、2016年4月29日に両国は「経済通商拡大協定（注：17年5月末時点で未発効）」を締結した。その内容は、政府調達に関して両国企業の参加条件を同等化し、サービス貿易も2015年に大筋合意に達した環太平洋パートナーシップ（TPP）や太平洋同盟で適用されているものと同等のルールが想定されている。さらに投資分野では、紛争防止や仲裁機関の設置が盛り込まれている。

メキシコとも通商協定を深化させる動きがある。同国とは、品目数を限定して関税を低減している ACE53 号と、南米南部共同市場（メルコスール）として締結している ACE54 号、自動車分野に限定した ACE55 号が発効している。ブラジル・メキシコ両政府は、ACE53 号で関税低減対象となっている品目数を、現状の約800品目から拡大し、さらにサービス、政府調達などを含めた協定に発展させるための協議を開始している。

一方、メルコスール域内について、ブラジルは2016年6月にアルゼンチンとの自動車協定（ACE14号）の延長を決めた。貿易自由化は実現していないが、今回の延長はこれまでの1年更新ではなく、2020年までの中期的協定となったことで、制度の安定性が高まったと見る見方がある。また、メキシコ、コロンビア、ペルー及びチリの4か国により構成される太平洋同盟との連携を視野に入れ、メルコスール加盟国内でも域内協

定にサービスや政府調達、投資を含めることが議論されている。2017年4月にはブエノスアイレスで、太平洋同盟とメルコスールの外相および貿易担当閣僚の会合が開かれた。これまでの会合でも確認されてきた貿易の円滑化、税関協力、貿易促進、中小企業支援といったテーマを推進することを再確認し、ロードマップを設けることで合意している。

域外との個別通商協定に積極姿勢

域外との通商協定については、メルコスール・EUのFTA交渉進展への期待が大きい。EUとの交渉は一時中断期間を経て2016年から交渉が活発化している。2016年5月、双方は協定締結に向けたリストの交換を行ったが、財の貿易だけでなく、サービス分野、投資、政府調達など広範な通商協定の締結を目指した内容となっている。ブラジル商工サービス省（MDIC）のアブラン・ミゲル・ネット貿易局長は「メルコスールとEUの協定は、交渉の進展度合いの面だけでなく、ブラジルの貿易投資促進に向けた、主要な通商相手国との協定モデルとして発展する可能性がある点において、ブラジルの通商政策上優先順位が高い」と述べている。今後の交渉進展は、EU主要国における大統領選挙や英国のEU離脱の議論もあり、EU側の交渉姿勢の変化も注視する必要があるものの、メルコスール側の交渉意欲は高まっている。なお、この他、欧州のスイス、ノルウェー、アイスランド、リヒテンシュタインにより構成される、欧州自由貿易連合（EFTA）についても、メルコスールは2017年1月に自由貿易協定の締結に向けた事前協議を終了しており、今後正式な交渉が始まる見込みだ。

さらにアジア地域とも個別の通商協定交渉の機運が高まっている。アジアではメルコスールとインドとの間で特惠関税枠組協定が2009年に発効しており、インド側450品目、メルコスール側452品目の関税を10%、20%、100%の割合

で引き下げるものだ。この対象品目の拡大を意図して、2016年に双方の関心品目の交換を行っている。また MDIC は2017年2月、日本と韓国について通商協定を締結する場合の関心品目の洗い出しを意図した意見公募を開始した。どのような結果であるかは本原稿執筆時点で公表されていないが、メルコスールとして交渉を前進させる地ならしは進んでいる。2017年4月には日本とブラジルの経済界の主要なリーダーから構成される「日伯戦略的経済パートナーシップ賢人会議」が開催され、その最終報告でも、日・メルコスール EPA 交渉の早期開始の重要性を盛り込んだ提言書が両国首脳に渡されるなど、官民ともに交渉に向けた機運の高まりがみられる。

投資協力円滑化協定（ACFI）を推進

最後にブラジルが近年、力を入れてきた分野として投資協定に触れたい。ブラジルは1990年代に14の投資協定を締結したが、いずれも議会では批准されていない。その要因について、特に90年代においてブラジルは投資受け入れ国であり、投資国企業に有利な条件を与える当時の投資協定のモデル自体が、ブラジルにメリットとして認識されなかった点が挙げられる。例えば通常の投資協定モデルで定められた「取用の制限と適切な補償」、「投資家と国家間の紛争解決」などの条項は、ブラジルの法制度、投資受け入れ国の主権を脅かす懸念が指摘されている。

しかし、「南南外交」の展開と歩調を合わせる形でブラジル企業によるアフリカ、中南米地域での投資増加を背景に、2015年以降、投資協力円滑化協定（ACFI）と呼ばれる独自の投資協定を各国と締結している。通常の投資協定が投資家保護に焦点を当てている一方、ACFIは国家の法的自治性を確保しながら、投資家、国家、社会の利益のバランスをとる内容となっている。

ACFIでは投資協定で問題となった投

資受け入れ国側の不利な条件を排除する工夫がみられる。例えば「取用の制限と適切な補償」に関して、通常の投資協定では間接取用も補償の対象となるが、ACFIでは直接取用のみを対象とし間接取用を規定していない。「投資家と国家間の紛争解決」については、国家間の紛争解決のみを規定しており、投資家が投資紛争解決国際センター（ICSID）や国連国際商取引法委員会（UNCITRAL）などの国際的な投資仲裁手続に則った方法をとることを規定していない。その代り、両国政府機関による合同委員会と、投資家支援を目的としたオンブズマン制度を設置し、双方の投資家の利害調整をはかる仕組みを導入している。いずれも投資受け入れ国の立場でコミットできる内容に制限したもので、国際標準となっている先進国の投資協定の視点では不十分な印象が否めない。

通商協定交渉の遅れを挽回する好機とも

このようにテメル政権下では、前政権からの方針転換を打ち出しこれまで停滞していた個別を含めた通商交渉に力を入れる意向を表明しているが、その内容をよく見れば、中南米域内の通商協定や、2015年以降に積極化している ACFI などその多くは前政権の延長線上にあるもので、ドラスティックに変化したという印象は受けない。それでもテメル政権での通商政策に期待が高まるのは、隣接する太平洋同盟加盟国も参加する環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）や、米国とEUによる環大西洋貿易投資連携協定（TTIP）など地域を跨いだ通商協定が進展するなか、国際的な交渉枠組みにブラジルが取り残されつつある現状への危機感の表れでもあるように見える。米国のトランプ政権誕生で、先進国の保護主義化に伴う既存の通商協定の交渉停滞も予想される。この状況はブラジルにとっては後れを挽回するチャンスとも捉えることができ、今後の協定交渉の進展に期待したい。

ブラジル貿易における真のボトルネック



村田俊典
(双日(株)執行役員
兼双日ブラジル会社会長)

貿易とは直接関係のない話だが、まず、印象に残るブラジルの原体験として一つ事例を紹介したい。

2008年頃、大手民間銀行のジャパンデスク担当時代、新規ブラジル赴任者の多くは外国人登録証オリジナルの発行が遅れる為、3か月以上銀行口座を開けない悩みを抱えていた。解決の為奔走し、漸くプロトコル(仮証)で口座開設可能という中銀通達を探り当てたのだが、銀行責任者はにべもなく「不可」と言う。理由は、何千、何万(正確には知らないが)とある中銀通達を現場(約3000店舗)に正確に伝え、理解してもらおうのは不可能で、物事の核心にある通達(ルール)を伝えるのが精いっぱいだからという。ブラジリアの意思が、末端に届くにはこんなにも大変なのかと。ブラジルは、ルール(ブラジリア)と運用(現場)のギャップが大きい国なのであると思知らされた。

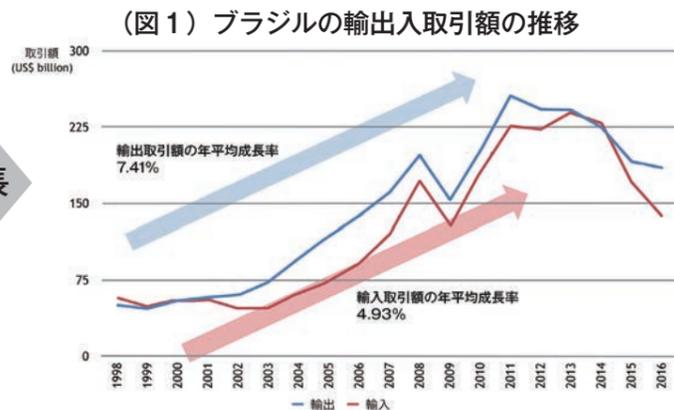
ブラジル貿易の伸長

ブラジルの貿易量は経済成長と呼応するように2000年代に入り急速に伸長している。1998年～2016年ペースでは輸出で約7%、輸入では5%弱の平均成長をしてきている。リーマンショックの影響を受けた2009年、資源価格が高騰した2011年から2014年、足元の経済減速の影響など、それぞれのアップダウンはあるものの、順調に成長していると言っても良いだろう(図1)。

しかし、主要輸出品目を年度毎に細かく見て行くと、色んな発見がある。全体における農畜産関連の輸出は1998年で約20%程度であったものが、2016年には約30%と大きく伸びている。また、トップ10の内容も変化している(表1)。

輸出品目毎の増減

大豆関連の輸出は全体の6.5%から13%へと割合もボリュームも大きく伸ばしているし、食肉関連の輸出も全体の1.8%から5.5%へ伸びている。ブラジルの持てる強みを生かし生産性を上げて競争力を高めてきた結果である(コーヒーは健闘している。オレンジジュースは8位から20位以下へとランクを落としているのは予想外)。反対に工業製品の割合は周知の如く低下傾向にある。こ



(図1) ブラジルの輸出入取引額の推移

(表1) ブラジルの主要輸出品目の変化 (US\$ billion FOB)

1998年			2016年		
品目	金額	(%)	品目	金額	(%)
1 鉄鉱石	3.25	(6.36)	1 大豆	19.33	(10.44)
2 コーヒー豆(生)	2.33	(4.56)	2 鉄鉱石	13.29	(7.17)
3 大豆	2.18	(4.26)	3 原油	10.07	(5.44)
4 大豆粕	1.75	(3.42)	4 粗糖	8.28	(4.47)
5 自動車(乗用車)	1.62	(3.17)	5 鶏肉	5.95	(3.21)
6 自動車又は農機向け部品	1.43	(2.79)	6 パルプ	5.57	(3.01)
7 履物	1.39	(2.71)	7 大豆粕	5.19	(2.8)
8 オレンジジュース(冷凍)	1.26	(2.47)	8 コーヒー豆(生)	4.84	(2.61)
9 鋼材	1.26	(2.45)	9 自動車(乗用車)	4.67	(2.52)
10 飛行機	1.16	(2.27)	10 牛肉	4.34	(2.35)

Source: MDIC

こが、ブラジルの将来を考えるうえでの問題点となる。

このような輸出品目毎の増減(特に減少)は世界がブラジルに求めているニーズの変化と、自国の事情による輸出競争力低下によるものがある。前者はブラジルだけでは解決できない問題であるためここでは論じない。後者について、様々なブラジルコスト(労働・税)の内、ロジスティック(港湾、通関)について見て行く。

ロジスティックの諸問題

ブラジルの港湾インフラについて、多くの人たちに誤解があるのは、1) 政府は1990年台から港湾競争力確保の為、確りと整備を進めてきた点である。1993年にはLei8630/93にてコンセッションを規定し、足元2013年には

その法律を変更し、コンセッション落札の観点単なるプライスからコスト・効率(higher efficiency & lower tariffs)も重視するように変更するなど対応してきた。結果、2) インフラのキャパシティは現在余剰であり、今の設備で2030年頃までの需要増加に対応できる。また、港湾開発の投資も2042年まで総額で約520億レアルの計画があり、その殆どが民間主導で進められている。全体感から、ここにボトルネックは存在しない(ように見える)。

しかし、ここには少

(表2) 物流パフォーマンス(LPI)ランキングと評価項目毎の順位(2016年)

LPIランキング(ブラジル) 55位/160カ国中					
通関手続きの効率度	インフラの質	輸送価格競争力	物流サービスの品質	荷物追跡能力	スケジュールの達成度
62位(▼7)	47位	72位(▼17)	50位	45位	66位(▼11)

()カッコ内はブラジルのLPIランキング55位と比較した際のランキングの差。 Source: World Bank

し落とし穴がある。輸出の上位品目で今後も拡大が見込まれるもの(大豆・鉱物資源)については民間が十分な投資をして、専用の港湾ターミナルを確保し、コスト削減を目指すのは自明だが、工業製品など単独の港湾インフラを持ってないところについては、生産者はロジコスト削減が他方本願となってしまふ点である。

世銀の国別の物流パフォーマンスランク表(表2)をみると、ブラジルは55位(2016年)と他国との比較において大きく劣後する。理由は2点。1) 通関手続きの非効率さ、2) 輸送価格競争力(コスト=主に人件費と倉庫保管料)である。ブラジルが付加価値のある製品を輸出したいと思えば思うほど、共有の港湾インフラを利用した輸出が増加するはずで、この部分の改善なしには競争力強化にはつながらない。

通関手続きの非効率性

また、通関手続きにかかる日数(輸出・輸入)についても、ブラジルは先進国比劣後しており、改善が求められる(図2)。しかし、この点においても我々には誤解がある。

ブラジルは1995年に輸出、1997年に輸入に対し、SISCOMEXと言われるシステムを導入して通関の自動化を目指してきた。それまで、全量紙ベースの書類審査であったものをシステムに変えたもので、画期的な改善がなされた。これは、明らかに2000年台以降の輸出のボリューム増加に貢献した。

税関吏のマンパワーを取引ボリュームに応じて増やすのは当然限界がある。従って、システム上で一定のパラメーター※を学習させその結果、緑(無審査)・黄(一部)・赤(全量検査)ラインに仕分けしたのち対応している。97年

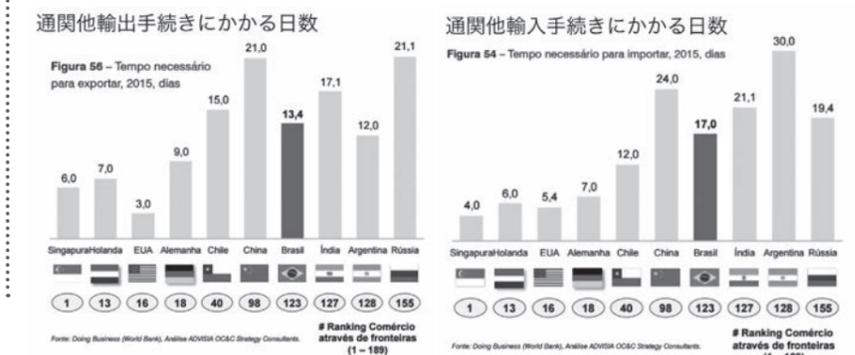
では約30%が緑ライン、2017年(現在)では約90%が緑ラインとなっている。国際経験の豊かなプロのフォワードから見ても、相当進んだ仕組みだと言われている。(※例えば中国産の綿織物は赤、免税恩典のある機械製品は赤など)

では、何故通関手続きが非効率なのか? 幾つか理由がある。まず、税関としては税金を上げたいという大命題がある。従って、申告書類の誤りがあっても罰金を科すなど、チャンスがあれば少しでも税金を余計にかけたいと思っている。フォワードの仕事は輸出者、輸入者と一体になり正しい書類を事前に作りこむ事に多くの神経を使う必要がある。これだけでも、コストアップ(=非効率)になるのである。

次は、税関吏のクオリティーや判断基準が一定でないという問題がある。マンウスの税関吏の経験値は主に電気部品など地域特有の物流に偏っていて自然であり、それ以外の物流が来た場合は通関に時間がかかるなどが代表例で、ブラジルの全ての港の税関吏が同じ水準ではないのである。

税関以外にANVISA(国家衛生監督庁)など他の管理機関の検査も必要な場合がある。このような検査も港によってクオリティーが一定でないという報告がある。また、食品の輸入については基本的に全量ANVISAの検査が入るわけだ

(図2) 通関等輸出入手続きにかかる日数



Source: World Bank

が、ボリュームの増加とマンパワーの増加は決して追いついていない。このようなクレームなどが総合して通関の非効率性となりひいてはコストアップ(=競争力低下)の大きな原因となっている。

余談となるが、輸入の場合、最近ではドライポートといわれる内陸の保税倉庫に荷物を一旦移動させて通関をする方法もある。このような保税倉庫は目的に応じたハイレベルの税関吏を設置することで競争力を高めてきており、インランドロジのコスト(横持ちコスト)次第だが、通関ははるかに簡易でスムーズである。

システムと現場の乖離

ここまで見てきたが、全ての場合において、連邦政府は将来を見越して対応を考えていると言っても過言ではない。法令、インフラ、システム、それぞれ準備してきている。少なくともブラジリアの官僚はしっかり手を打ってきた。

しかし、問題はやはり現場である。港を運営する人のコスト(高い)、港によって一定でない税関吏のクオリティーや「統一されていない判断基準」、関係各省の現場担当者のクオリティーやマンパワーなど、エグゼキューションに大きな課題が残され、その結果大きなコストとなって跳ね返ってきているのである。真のボトルネックはここにあるのだと確信している。

最後に、冒頭に述べたプロトコル(仮証)による口座開設は、関係者の努力と銀行側の理解により現在では口座開設が可能になっている。現場の地道な努力の賜物であろう。

BRASIL E JAPÃO UMA PARCERIA DE SUCESSO!

ブラジルと日本の パートナーシップ



西森ルイス弘志
(ブラジル下院議員、伯日議員連盟会長)

ブラジルと日本

ブラジルは日本から距離的には一番遠い国だが、今までの両国の友好関係を見れば両国が一番近い国だと言っても過言ではないと思う。

私は、機会があるごとに、ブラジルの最良のパートナーは日本であり、また、日本の最高のパートナーはブラジルだと、いつもお話しさせて頂いている。それは、ブラジルには南米最大の国内マーケット、豊富な天然資源、エネルギー資源、それに世界に食料を供給出来る輝かしい農業があるからだ。

一方、日本は素晴らしいハイテクノロジーの最新技術と科学を有し、高品質な工業製品の開発では世界のリーダーとして活躍しており、世界で最も整備された日本の生産ラインの高い効率性は広く認められている。

日本は資源の問題があり、原料を輸入に頼っているが、原料輸出国ブラジルの資源＝原材料と日本の素晴らしい技術をかみ合わせれば大きなメリットを生み出すのは明確であり、両国は最高のパートナーとなることは間違いない。

ブラジル市場と日系進出企業

約2億700万人の人口を抱えるブラジルの国内市場は南米一であり、この

市場を支えているのが消費者マインドだ。ブラジル人には節約や貯金をする習慣がない。なぜならば、1980年代から1990年代にかけて、ブラジル国内のハイパーインフレによりブラジル通貨価値が下落し、その後、コロール大統領政権時代(1990～1992)には、全国民の銀行預金が凍結された苦い経験があるからだ。こうした背景から、ブラジル人は貯金への関心を失い、稼いだお金をすべて消費に回すか、不動産等に投資をすることになって、大きな消費市場が形成されている。

ブラジルには現在、約700社の日本からの進出企業が存在し、多くの大企業が進出しているが、これからは、中小企業のブラジル市場への投資が求められている。

中国における安い労働力を求め、日本から約2万5千社が中国市場に進出しているが、その労働力も枯渇し始め、新しい市場が求められているのが現状であり、是非日本の中小企業にもブラジル進出を考えて頂きたいと願っている。

私も16年間にわたって毎年、ブラジル経済友好使節団にコミットし、ブラジル企業家、政治家親日家等を日本に引率してきた。この間、多くの日本の企業のブラジル進出のお世話をさせて頂いた。また、ブラジルのコーヒー、鶏肉、オレンジジュース等の輸出をサポートする仕事もやってきたが、特にブラジル人の企業関係者に日本の文化、経済、政治、教育、インフラ整備を見学してもらい、その結果、多くの企業家や政治家等が認識を深めてくれた。こうした交流事業が大きな成果を出したことは、私自身大変うれしく思っている。

解決すべき課題と日系社会

言うまでもなくブラジルの投資には多くの未解決問題が山積したままだ。労働問題、税金問題、社会福祉問題、教育面の問題等であるが、ブラジルは昨年ルセフ前大統領の弾劾裁判以後、国の再建・発展と経済成長を目指し、新しい方向に歩き始めていることも事実だ。

現政府(テメル大統領)は真剣にブラジル経済回復、消費拡大、商工業の発展に取り組んでおり、つい最近新しい労働法が下院議会で可決され、年金制度、税制度の改革も審議をされていることも指摘したい。本年度の末までにはこうした改革の成果として経済向上に繋がっていくと確信している。

また、ブラジルには約170万人の日系人が住んでおり、海外最大の日系人口を抱えていることから、日本企業にも有力なパートナーになっていることは間違いない。

来年、2018年は日本人移民がブラジルに移住して110周年記念の節目の年となる。この110周年は若い世代の年であり、スポットを若い人にあて、若いリーダー育成の年であり、日本の文化、習慣、教育、思想などを次の世代へ伝承する年だ、と考える次第だ。

日本政府は長年にわたりブラジルのパートナーとして、ブラジル社会に貢献してきており、心から感謝している。例えば、製鉄関連ではCARAJÁS, USIMINAS等大きなプロジェクトが特筆されるし、セラード地帯の農業開発等についても、目を見張る成果をあげているからだ。

一方、ブラジル政府は多くの親日家を通じて交流を深めている。

こうした両国間パートナーシップがこれからも末長く続き、両国の繁栄につながる事を祈念している。私も、ブラジル下院議員として今後とも日伯交流に貢献すべく微力を尽くしたい。

在ベレン領事事務所勤務を終えて 管轄地域とそのポテンシャルについて

小林雅彦(前ベレン領事事務所長) 文責:編集部



今回2年8か月のベレン駐在であったが、自分がかつて経験したポルトアレグレ、ブラジリア、サンパウロなどの南部ブラジルとは違う、北伯・東北伯の実態を肌で感じる事が出来た。管轄4州の概要・現状、トピックについてお話ししてみたい。

パラ州について

州GDPは、全国27州中の13位で人口820万人、主要産業は鉱業、牧畜業、農業、観光業などだが、私が強調したいトピックが、3点ある。

その1. アルプラス社関連

Valeが抜けノルウェー資本と日本資本のジョイントへ資本構成が変わったが、年間生産量45万トンの約半分が日本へ輸出され、これは日本のアルミ輸入量全体の10%となっている。この積み出し港として機能しているのが、ヴィラ・ド・コンデ港(ベレンから車で2時間)であり、現在、アルミだけでなく穀物ターミナルも建設中で、中西部の穀物の物流が改善されることが期待されている。

その2. トメアス移住地におけるアグロフォレストリー

モノカルチャーによる胡椒栽培の壊滅的減少という実体験を踏まえて、考案・開発されたのが、アグロフォレストリーという森林再生と農業を混合する手法だが、これが地歩を固めてきている。収穫された果物がトメアス組合加工場で冷凍果汁に加工され、日本へ輸出されている。輸入総代理店フルッタフルッタ社を通じてアサイや各種熱帯果汁が販売されているが、販売では苦戦しているため、日本以外の市場開発も行っている。一方、日系農家に限定されていたアグロフォレストリーのノウハウを、トメアス周辺からアマゾン地方全体に広める啓蒙的運動を展開

中でパラ州ばかりかアマゾナス州などにも浸透中で、JICA草の根技術協力のスキームも活用されている。さらには、このアグロフォレストリーが農業資源としてばかりか観光資源にもなっている点を指摘しておきたい。この新農法を見学したい観光客が、日本ばかりか欧米からも来ており、週200名ほどのレベルまできており、受け入れ側のトメアス組合はうれしい悲鳴をあげている。一つの地域経済活性化の成功例になってきている。また、アサイのほか、高級チョコレートの原料となる選別カカオの輸出も増えつつある(輸入者は明治製菓)。

その3. ベレン食文化への脚光

パラ州の多様にして伝統的な食文化に注目が集まっている。しびれる効能のあるジャンプー、あるいは有毒マンジオカのしぼり汁を加熱・発酵して作るツクピーなど、あるいは様々な水産物などを原材料とした食文化が、ミラノの「食の万博」で脚光を浴び、ユネスコによってベレン市が「クリエイティブ・シティ」に認定されている。「世界のシェフ、ベスト50人」に選ばれるなど国際的に知られているサンパウロのシェフ、アレックス・アタラも、頻りにベレンを訪れており、ベレンが新しい食文化の発信地になってきているともいえる。

アマパー州について

かつて連邦直轄領で赤道直下の州。唯一の進出企業が、日本製紙の現地法人であるアムセル社だ。ユーカリの植林とチップ生産を行っており、チップはサンタナ港から輸出されており、同州にとっては基幹産業になっている。赤道のところどころに記念モニュメントがあるが、あまりぱっとしないものなので、ここを改修して観光客を呼び込むとか、

観光開発の余地はある。

マラニョン州について

日本からの進出企業はないが、輸物流拠点としてのイタキー港に注目が集まっている。現在は、カラジャス鉄鉱石の積出港であるが、新穀倉地帯マトビバ(マトグロソス北部+トカンチンス北部+ピアウイ南部+バイーア西部)からの穀物輸出拠点になるべく多くの投資が行われている。また、新しい観光地として北部海岸線に位置するレンソイス・マラニェンセスも注目される。日本のテレビやガイドブックで紹介されたこともあって日本からの観光客もサンパウロ在住日本人も多数訪問するようになってきている。ちなみに砂丘地帯の悪路に耐える車種はトヨタ・ハイラックスのみで他の車種は淘汰されてしまった。こんなところでもトヨタが評価されていて驚いたものだ。

ピアウイー州について

ノルデスチ(東北部)の州のなかでも最貧州で、日本からの進出企業はないが、マトビバの一画を成す州の南部セラード地帯における農業開発(特にダイズ)が著しい。また、私立高校のなかには全国教育水準試験でトップクラスの成績を残した学校もあり、そうした学術・教育交流の一環として、UNINOVAFAPI大学と新潟大学の学術交流協定が締結されている。

来年2018年は日本ブラジル移住110周年であり、2019年は日本人アマゾン移住90周年である。この歴史の重みを味わったのが、ベレン駐在という体験であった。

(編集部註:本稿は、弊協会主催で6月8日開催された講演会のスピーチ内容をまとめたものである。)



↑ テメル大統領訪日(2016年10月)
(右からテメル大統領、コエリョ鉱山エネルギー大臣)



↑ パラナ州伯日友好経済使節団(2017年4月)

「Japães」という チョッと悲しい現実

深沢正雪
(ニッケイ新聞編集長)



日常的な場で普段着のまま何度も会って雑談し、別れ際にはアブラソ (抱擁) した相手と、改めて公式の場であったら高そうな背広をピシッと着て「初めまして」と名刺を出された——そんな違和感を Japan House (JH) に感じた。

しみじみと「これで Japães になってしまった」と感慨にふけた。多民族国家 Brasil では、いろいろな出自の文化を持つ共同体が共存している様子を「Brasis」と複数形で表現する。その日本版だ。

JH のコンセプトは、現地を知らない日本側でガッチリ固められている感じだ。幹部職員に現地人はいるが、日系社会との共同企画は一切ない。これでは「日本人の家」だ。本当は「日本文化ファンの家」であるべきではないか—との疑問をもった。

当たり前だが、日系社会は日本の一部ではない。ブラジルの一部であり、その文化も正確には「日系文化」だ。だいたい日本移民が「想像の共同体」として思い描いていたのは、自分達が旅立った頃の祖国だ。そこから何世代もかけて、当時の日本文化を現地に馴化させ、子孫に受け入れられたものだけが「日系文化」になった。これは外国移民の文化変容の基本パターンだ。それがブラジル人からは「Pedaco do Japão (日本の一部)」として愛されてきた。

例えば、日本人にはヤキソバは、外国に誇れる上品な日本食ではないかもしれない。でも、日本移民が広めた Yakisoba はブラジルでは立派な日本食であり、中国人ですらメニューに Yakisoba と書くほどだ。移民の生活実感からすれば、文化普及で大事なことは「どれだけ相手に幅広く受け入れてもらえたか」であって、「どれだけ正確に伝わったか」ではないと思う。

もう一つ JH で気になるのは、英語表記の名称だ。例えばドイツ系の文化普及機関「Instituto Goethe」も、元々は「Casa Goethe」と愛称されていた。仏系も「Aliança Francesa」、英国系も「Cultura Ingresa」とボ語なのに、

なぜ日本が英語を使うのか？ ちなみに当地では日本の宗教「生長の家」は「Seicho-no-Ie」で通している。つまり日本語すら OK なのだ。

当地インテリには、移民が持ち込んだ外国語には寛容だが、英語表現は嫌う人々がいる。日本政府が作った施設が英語表記をすることから感じられるのは、メインターゲットはロンドン、ロサンゼルスなのだろう—という雰囲気だ。だから展示内容も先進国のインテリ市民に訴える高尚なコンテンツなのだ、と。

もう一つ現地側として困惑するのは、「いつまで」が不明な点だ。外務省は「ずっと続ける」と意気込むが、現実的には「4年ごとに予算見直し、いずれ独立採算」という方向性だ。とりあえず、最初の期限は2年後、2019年3月らしい。どうやったらあれが独立採算化できるのか、現状では想像もつかない。派手にやる間は良いが、その分、閉館してから寂しくなるのでは、地元としてはイヤだ。

その点、リベルダーデは50年経っても東洋街だろう。その間、大衆の中に日本文化ファンを延々と作り続ける。そのような現地主導の動きを支援する姿勢がもっとあっても良い気がする。20万人が入場する県連日本祭りにも、もっと大々的に政府が来店して日本を宣伝したらどうか。JHは莫大な費用を投じて開館し、高額な家賃を払い続け、数年で終わりになるかもしれない。どちらの方が、安定的かつ投資効率の高い日本文化普及なのだろう。

JH サンパウロは、日系社会と共鳴しあってお互いに活性化するような積極策をとってほしい。それこそが「日本文化の国際的な相補増幅作用」という気がする。それで日本文化が侵されるのではなく、逆に芯がはつきりして、強くなるのではないか。

相手あつての文化普及だ。ブラジル、米国、英国とまったく違う国柄の場で、同じコンセプトが通じると考える方が柔軟性に欠けている。開館直後に想定を上回る来場者が訪れているのは、過去に幅広い層に親日派を増やしてきた「積み重ね」が下地にある。日本側が見せたいものを押し付けるのではなく、受け取る側の多文化な国柄を尊重する姿勢も大事ではないかと思う。

JH もそうだが、安倍政権は「クール・ジャパン」を唱えて外国に親日派を増やそうとしている。だが、それ以前に国内でやるべきことがある。すでに日本国「住民」となっている永住ビザを持つ日系人が、もっと安定した暮らし、将来設計ができる生活モデルを考えてほしい。特に、子弟が日本人並に大学進学できるような仕組みを工夫してほしい。彼ら17万人が国内で「日本はクールだ」と訴えることの方が、ブラジルにおいては効果的な日本宣伝になると思う。

すましたジャパン・ハウスの中から、パウリスタ大通りの愛する雑踏を望む



ブラジル・パイロットペン 事業開始から63年、更なるチャレンジへ

村松正美
(ブラジル・パイロットペン(株)社長)



創成期

ブラジルへ最初の日本人移民の到着からわずか46年後の1954年、日本以外で生産販売拠点として良好なビジネスチャンスが生まれるとして、パイロット万年筆(株)(現(株)パイロットコーポレーション)はサンパウロ州イタケラに初めて会社を設立した。当時は万年筆とそのインキを日本から輸入し商業活動を開始。販売活路確立にブラジル全土を駆け巡る日々を送った。一方で現地生産の準備を進め翌年1955年コンジッド・ピニャアウに15人の従業員と100㎡に満たない倉庫を借り入れ万年筆用のインキの製造に着手し生産量を伸ばしていった。1958年いよいよ油性マーカー(Pincel Atômico)の生産を開始する。現在でもフル生産を行っている。万年筆の現地生産の準備が進み手狭になった倉庫から1959年、サン・ミゲル・パウリスタに自社工場を開設、このサンミゲル工場移転と同時に万年筆の現地生産を本格化させ直接従業員の数は350人に達した。ブラジル・サンミゲル工場は日本以外の工場の中で最も古い海外工場となった。現在は2013年1月にサンパウロ州ジュンジアイ市に35,746㎡の土地を購入、新工場を建てサンミゲルから工場移転を果たした。

チャレンジ

今日、販売されている主要製品の一つに、ホワイトボード用のマーカーペン、V-BORD MASTERとそのカートリッジ(レフィル)がある。これらの製品は2007年8月当時、大量に輸入された。この輸入計画の背景にはブラジルで販売されているホワイトボードマーカーの品質の改善にあった。当時のホワイトボードマーカーは直径5mmほどの円筒形のプラスチックの中にフェルトを詰めインキを浸み込ませて先端のフェルトチップにインキを供給するタイプである。安価に製造できる反面、ホワイトボードに長距離筆記を行うとインキが追従せずかすれやすい現象が起きていた。またインキが少なくなるに従い筆跡が薄くなる性質でもあった。この現象から薄い筆跡が問題になっていた。この課題に対応してフェルトにインキを浸み込ませるタイプからフェルトタンクを用いない直液カートリッジ式のタイプへ機能アップした製品を投入する計画を立てた。直液式のメリットは長距離筆記でも追従が良くかすれず、インキ減少に対しても筆跡は当初の濃いままに筆記出来る事である。この製品を各地販売店に持ち込み試筆してもらい異口同音に好感触を得て大量入荷に踏み切った。当然保管スペースが必要となり外部倉庫を借りる事になった。いざ上市へ。が思うように伸びない。同様の製品がブラジルになく機能が進んだもの

であったこと。直液の販売期間がないことで最後まで濃く筆記できるのが液漏れが不安などと安全性や利便性に理解を頂けなかった。当社の販売スタッフ、プロモーターにより高校、大学、企業へ出向きデモンストレーションを繰り返し、サンプル提供を行った。デモンストレーションでは他のマーカーとの比較ではなくV-BORD MASTERの「売り」を徹底して説明した。当時は学校関係立ち入り許可は関係官庁から容易に出ず、デモンストレーションの前に多くの時間を立ち入り許可取得のために費やした。許可取得できても次の難関は該当する学校の購買担当者とお泊を取るのに一苦労、口頭説明では製品の良さが伝わらず資料を送付しても閲覧頂く時間がなかったようでアポ取りにも時間を要した。訪問先の一部の学校ではチョークが主流になっていてマーカーの販売の前にホワイトボードの良さを紹介したこともあり販売の舞台作りも行った。コマーシャルはデモンストレーションと同時に雑誌、新聞や駅構内看板で実施。結果3年間を要したが全世界でNo.1の売上を得ることが出来ている。日本国内市場と異なったユーザーの動向にブラジルでの販売の難しさを学んだ。ブラジル国内ではお陰様でマーカー類のシェアNo.1を維持している。今日のV-BORD MASTERマーカーは、私立公立小中高の学校、大学、企業や市、州と連邦機関で使われている。創業以来造り続けている油性マーカーPincel Atômicoはピンセルアトミコが油性マーカーの代名詞になっている。水性カラーペンのLumi-Colorもブラジルに適したプロモーションを行い定番品として定着している。どれもPILOT PEN DO BRASILが自信を持つ製品である。これらの結果、当社はブラジル市場で絶対的なマーカー類のリーダーとしてのポジションを保っている。

更なるチャレンジ

2015年下期から滑らかな書き味の新油性ボールペン製品名BP-1INOXの一貫生産を開始した。ボールペンの心臓部であるチップ(精密加工、インキが出る先端部)がブラジルで加工出来たことが大きな自信につながっている。ブラジルに筆記具は沢山販売されているが、お客様が「これ欲しいな」と思われる製品を造り続けて行きたい。



旧工場=サンミゲル工場

新工場=ジュンジアイ工場

ブラジルの司法制度と知的財産制度の問題



ホベルト・カラペト
(Licks Attorneys.
ブラジル弁護士)

連載

ビジネス
法務の肝

ブラジルの知的財産制度では、裁判所の利用が極めて重要であり、頻りに利用されている。権利化に関連する紛争においても、侵害発生時の対策としても、裁判所の利用には、メリットがある。ブラジルでは、自身の事業活動を保護するだけでなく、場合によっては知的財産権を持っていることで有利な立場に立つことができる(税制関係や政府関係における契約締結時など)。

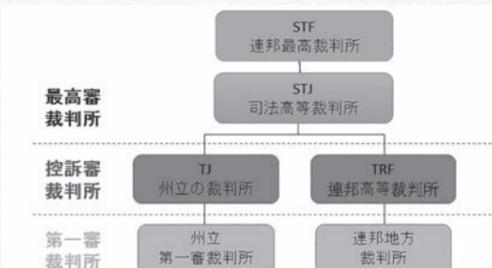
日本では慣習として裁判所の利用は比較的少ないといわれているが、ブラジルでは裁判所、つまり司法へのアクセスが非常に容易であり、2015年に行われた調査によると、ブラジル特許庁(INPI)に対する係争中の訴訟は1万件を超えている。

知的財産関連の裁判制度

ブラジルは管轄権に関するルールが複数であり、裁判所の種類も豊富である。知的財産に関する紛争としては、上訴を判断する最高審裁判所の他は、州毎の州裁判所が管轄権を有している権利の侵害に関する訴訟(以下、「侵害訴訟」という)と連邦裁判所が管轄権を有している政府機関の判断を取り消すための訴訟(以下、「審決取消訴訟」という)の2つに分類される。

ブラジル特許庁の審決(登録査定や拒絶査定等)に対して不服がある場合、審決を取り消すための訴訟であるため、必然的にブラジル特許庁が被告となる。ブラジル特許庁は連邦機関であるため、憲法109条によって、そのような訴訟は連邦裁判所の専属管轄とされている。一方、侵害訴訟は民事上の不法行為に基づく請求であるため、地方の州裁判所による土地管轄権によって裁判所を決定することになる。

また、2000年からリオデジャネイロ連邦裁判所に知的財産の案件を専門的に扱う法廷ができ、2001年からリオデジャネイロ州裁判所にもそのような法廷が設立された。2011年からサンパウロ州裁判所の控訴



無効性に関する紛争は連邦地方裁判所に提訴される。

侵害に関する紛争は州立第一審裁判所に提訴される。

裁判所にもできた。

「侵害に関する請求」と「権利の有効性に関する請求」が別々の裁判所に対して行われる制度は、「分離制度」と呼ばれ、ブラジル以外ではドイツでも似たような制度が存在する。ブラジルの裁判に関するチャートは添付の通り。

ブラジル特許庁に関する訴訟

ブラジル特許庁の審査結果について多くの場合不服がある。近年、審査の質が向上している一方で、審査活動の最終的な意見は裁判所で決定されることが多い。その関係で、たとえば、ブラジル特許庁の最終的な拒絶査定を覆すための訴訟の原告勝訴率は68%である。連邦裁判所はブラジルにおける政治的な動きに左右されずに、ブラジルにおいて知的財産法の適切な解釈を施行している。いかなる審決、たとえば、登録査定、拒絶査定、却下処分等についても、最終的に裁判所で争うことができる。

また、一般的な審決取消訴訟以外に、ブラジル特許庁の審査遅延問題に対して、裁判所で審査の早期化を求めることが一般的になりつつある。ブラジルでは審査の遅延が重大な問題(特許平均審査期間10年間、商標平均審査期間25カ月)となっており、大半の判決は出願人に有利なものとなっている。全訴訟の85%において、ブラジル特許庁に対して60日以内に審査に関する判断(オフィスアクションもしくは査定)を行うよう命令が出された。裁判所を通じた早期審査の場合、最終審決までの平均時間は約6カ月である。

ブラジルにおける侵害訴訟

知的財産の権利者の許可を得ずに知的財産が使用された場合、その使用行為は侵害とみなされる。基本的に、侵害行為として製造、使用、輸出、販売申し出、販売、その他の行為が含まれている。

ブラジルでは、損害賠償の金額は米国ほど高くはない一方、侵害行為を素早く差止めることが可能ということが有利的に使えるものであろう。ブラジルにおいて、侵害訴訟の最も強いところは、基本的に、いかなる主張をしても仮処分の差止請求が可能といえる。差止請求は広く利用が可能で、商品と会計帳簿の捜査押収を含むこともある。

侵害の際に、早い救済を求めることができるのがブラジルにおいて知財を取得するメリットのひとつである。

ブラジル個人所得税の留意点(その2)



都築慎一
(ブラジル公認会計士、
トーマツアドバイザー)

不動産に関連する所得

ブラジル居住者は、原則全世界の所得がブラジルで課税されるが、「日本に所有する不動産に関する所得」など例外規定もあることに留意する必要がある。日本ブラジル租税条約では、不動産から生ずる所得は、不動産が存在する締約国において租税を課すことができるとされている。

たとえば、日本からブラジル子会社に派遣された人が、日本の留守宅を人に貸すことにしたとする。この家賃収入は、日本でのみ課税され、ブラジルでの課税はない。たとえば日本の留守宅をブラジルに居住する間に売却し、譲渡益がでたと仮定する。この譲渡益に関する課税もブラジルでは行われず、不動産の存在する日本でのみ、課税されるということになる。

一方、日本からのブラジル派遣者がブラジルで不動産を取得した場合は、これを売却した際の譲渡益は、不動産の存在する締約国、すなわちブラジルで課税されることになる。

賃貸契約と住宅手当

駐在員が現地で住居を借りる場合、契約書類上の煩わしさや言語の問題から、現地法人総務部などの助けを借りて、賃貸契約が、家主と勤めている現地法人の間で行われることがある。このとき、本人が、現地法人から住宅手当をもらう代わりに、現地法人が家賃を直接家主に支払い、家賃を会社の経費として会計処理しているケースが時々見受けられる。

この家賃は、法人税法上、本人の所得と考え、給与と役員報酬に含めるべき金額であることから、費用としての控除は認められない。さらに税務調査があると、法人の課税問題だけでなく、本人の報酬に含めていないことに対する個人の所得税の納付不足に対しても追徴されるので、注意が必要である。

ブラジル所得税確定申告

<医療費>

医療費は課税所得の控除項目になっており、本人と扶養家族の分も含めて、金額の制限はない。医療費として認められる範囲も厳しい制限はない。ただ薬代などは、病院領収書の中に入っていない限り、認められていない。

留意点は、単身赴任などの場合、本人だけでなく、日本に

居住する扶養家族の日本での医療費も、所得からの控除が認められることである。ただ、税務署は、通常、ブラジル国外で支払った医療費の控除に対しては、後で詳細な情報を求めることが多く、実際は簡単に控除が認められるわけではない。

<入国前に保有する財産の申告>

ブラジルでは、一定額以上の所得(おおよそ年間で9000米ドル以上)を得る者は、国籍を問わず、所得税確定申告を提出しなければならない。そのため、通常、駐在員は普通確定申告提出が義務付けられる。入国後、初めてとなる確定申告書の提出時(翌年の4月末日まで)には、特に留意する点がある。

納税者は、国内、海外を含め、不動産及び一定額以上の動産については、申告書内にある財産申告欄に前年度と当年度の、財産目録をリストアップしなければならない。入国後初めての申告書では、入国前に保有する日本などに保有する財産、借入金などの負債残高を記入申告する。申告しておけば、入国前の所得に関してはブラジルでの課税はない(注1参照)。

日本の財産を申告しておかないと次のような問題が起きる可能性がある。駐在員の入国後は、税務上は居住者としてブラジル人と同じく扱われるので、入国前にすでに日本で所得税を払って保有した日本にある財産であっても、ブラジルでの申告が必要となる。

ブラジル国外に保有する財産も申告しておかないと、隠し財産と間違えられ、取得に使った金の出所が疑われるリスクが発生する。近年、特にG20諸国では、課税逃れをとらえようとする目的から個人の保有する海外資産について、各国の情報交換をして、これを把握しようとする動きが具体化しつつあることに留意。

ブラジルの本人銀行口座から、日本を含め、ブラジル国外の本人個人口座へ送金を行なおうとする時、一回の送金が3000米ドル以上であると、一般的に個人所得税申告書のコピーが必要となる。ブラジルの所得税申告書に、財産として海外に保有する口座とその残高が書かれていないと、3000米ドル以上の送金はむずかしくなる。(次号に続く)

注1:日本などに残した財産から生ずるブラジル入国後の利子所得や株式譲渡益などは、ブラジルで課税される(日本で源泉徴収があれば差し引く)。

(都築氏はフジアルテなどの顧問を務め、『ブラジルの税制体系』『ブラジルの税を知る』などの著書がある。)

母国にして異国 ブラジルでの自主研修から学んだこと



照屋エイジ
(司法試験合格者)

初めに、私自身のことについて略記させていただきたい。

1992年、ブラジルはサンパウロ市にて出生。8歳のときに来日し、以後、大学院まで日本で過ごす。2016年に大学院を卒業後、同年の司法試験に合格。

翌年3月中旬にブラジルに帰国し（ポルトガル語に不慣れなので「帰国」というのにも違和感が残るが）、サンパウロ市の二宮正人法律事務所にて研修をさせていただいている。5月末現在までに、市内の労働裁判所や高等裁判所、日系団体主催の秋祭り、首都ブラジリアなども訪れ、刺激的で示唆に富む日々を送っている。8月半ばまで当事務所にて研修を継続させていただく予定である。

本稿では、ブラジルの大学教育に参加し感じたことについて簡単であるが述べたい。このテーマについて報告したいと考えた理由は、第1に、私自身がつい最近まで学生の身分にあり身近なテーマであると感じたからである。そして第2に、幸いにもこの研修を通じて、大学に通う多くの友人を得ることができ、彼らから教育について話を聞く機会に恵まれたからである。大学の講義を受けることができたのも彼らの協力に負うところが大きい。

私は、いわゆるロースクールの講義を見学しているが、ここでの特徴は、年齢層が多様であることが挙げられるだろう。教室を一瞥するだけでも、20代前半とみられる若者から60歳に差し加かろうかといった者まで、幅広い年齢層がいることに気がつく。教室に入り講義が始まるまでのちょっとした時間の間にも、彼らは、前回の講義の内容や昨日起こった出来事などについて世代を超えて仲良く談笑する。教室だけでなく、大学近くのカフェまで少し足を伸ばしてみると、老若男女が肩を抱いて盛り上がりしている風景も見られる（突然お邪魔した私にもコーヒーやビールをご馳走してくれる方もいた。もっとも、講義前にビールをしこたま飲んでサボってしまう人も多く、私も一度だけ、いや二度ほど、共犯になった）。

日本で通っていたロースクールにおいても、数こそ少ないがご年配の方がいらしたので、ブラジルでも年齢層が広いのはそうした場だけだろうと考えていた。しかし、サンパウロ大学の文学部で学ぶ知人から「うちの学部にも年配の人は結構いますよ」と教えてもらった。詳しく話を伺ってみると、どうやらブラジルには「第二の大学」の発想があるようであった。これは、大学を卒業したのちに何かしらのキャリアを積んで、そのうえでまた大学に行くという発想である。この考えには少なからず衝撃を受けた。日本の大学に通っていたと

きにキャンパス内でご年配の方を見ることは極めて稀であったし、ましてやそうした方々と若い大学生らが仲良く談笑する場面を一度も目にすることがなかったからだ。歳を重ねても気兼ねなく大学に通い、若者とも分け隔てなく交流する。日本においても「高齢者が大学に通うことが増えてきている」ということはニュースを通じて知識として持っていたが、現実には目のあたりにしてその柔軟さに感銘を受けたことを覚えている。

また、多様な人種が一堂に会していることも特徴として挙げられよう。もちろん、人種が異なっても当人たちの間で差別のようなものは全く見られず、各々が上記のように親しげに歓談していた。冒頭のとおり、私は小学3年生から日本の学校で教育を受けたが、その頃はクラスどころか学校全体でみても、「日本人」以外の子の数は少なかった。そして、その数少ない異人種の子たち（私も含めて）は、奇異の目に晒されいじめの対象になることも一再ならずあった。そうした苦い経験があったので、人種を異にする者同士が懇ろにしている雰囲気には一種のカルチャーショックを受けたのである。

翻って現在の日本に思いを巡らせてみると、グローバル人材の育成やグローバル国家を標榜する割には、日本人の他人種への冷遇が随所でみられ物寂しい心持がする。決まったルールや枠を外れた者に対して冷ややかな目を向ける風潮もこの肌で感じ、中学生のころにはその閉塞感にひどく思い悩んだ。

教育は幼少期より始まる。人格が形成される期間に自分とバックボーンを大きく異にするであろう他人種に触れることにより、視野は広まっていくのではなかろうか。そうした積み重ねを通じて自然にグローバル感のある子たちが育っていくと信じている。

日本で学ぶ小学4年生の従弟の集合写真をみると、外国人とみられる子が多くなってきていることを痛感する。学生時代に所属した国際ボランティアの活動においても、外国人の子らの数が少なくないことを実感した。彼らが分け隔てなく親交を深めていくことを期待するが、学ぶ環境が、異なる存在を排除していくような閉じたものになってしまっただけでは望み薄だろう。

後世代の子たちが、お互いを偏見なく知り合うことのできる環境をかたちづくる一助になりたい。母国であり異国であるブラジルの地でこうした志を新しくし、日々強くしている。

(編集部註：二宮正人教授によれば、照屋エイジ氏は、在日ブラジル人としては司法試験合格者第一号である。)



勝負強さ

今年の3月まで、サンパウロ州のサンパウロ市のお隣、サンベルナルド・ド・カンポ市というところにある日系の学校にて、研修生として11ヶ月間生活していた。たまたまその学校にいた日系人の体育の先生が、広島県人会の女子バレーチームのコーチをしていた。その先生に誘われてチームの練習に参加するようになった5月。ポルトガル語はろくに話せなかった。練習は、土曜日の午前中の週に1回。行く度に、大きくメンバーの顔触れが変わる。「あんまり熱心じゃないのかな？」と流していた。年齢層も30以上の人がばかりだし。中学・高校と部活で毎日のようにしていた人間としては、週1回3時間は物足りないが、現役の時に比べ格段に感じる体力のなさ。それでも、チームの中では活躍できていた。

広島県人会のチームに参加し始めて四カ月ほどたった頃、いくつかの大会に出るようになった。週一回の練習より、試合に出ている方がチームのメンバーとより親しくなれている気がした。12月だったのだろうか。2セット先取の大会が多い中、3セット先取の大会の決勝戦があった。

すでに2セット取られていた。そんなときに限って調子が悪い。というより、プレッシャーとか緊張とかで思うように身体が動かないのを認めたくなかった。高校生の自分なら、毎日の練習を思い出して振り払っていたが、週一回の練習で自分の中で信じられるものがなかった。いつも優しいコーチさえも色々言ってくる。自分の中で焦る気持ちがかみ上げて来た。

このセット落としたり負けの第三セット目。自分は大して活躍しないまま、なんとか1セット取った。それでもあと2セット取らなければいけない。体力の限界を感じてかなり後ろ向きだった。それが顔に出ていたのか、チームメイトがハグして励ましてくれた。1人でなくみんなが。こんな状況で何の根拠を持って、人を明るく励ませるのか。自分を信じ続けてくれる姿勢に元気が出て来た。5セット目が終わり、トロフィーをもらった。最後まで励ましてくれたブラジル人のおかげで、チームでやっていくバレーボールっていいなと改めて感じた。

ジャーナリストの旅路

同じ「ポルトガル語圏」

昨年夏、リオデジャネイロ五輪の取材で1カ月間、ブラジルに赴いた。ブラジルのポルトガル語の発音を現地で聞くのは初めて。ポルトガルとブラジルのポルトガル語の発音はどれくらい違うのだろうか、楽しみだった。

「～の」を意味する「de」の発音。大学時代、ポルトガル・コインブラに留学した時に聞こえてきたのは、スベル通りに「デ」。人によっては「ドゥ」に近い。ブラジルではご存じの通り「ヂ（ジ）」だった。聞いた印象は相当違う。

だが、意外だったのは語末の「s」。ポルトガルでは「シュ」だ。「nós estamos」は「ノシュ エスタモシュ」。ブラジルでは必ず「ス」となると思っていた。だが、1カ月間、我々取材チームの運転手としてリオの街を案内してくれたりオッ子の男性は、1日の予定を終えてホテルまで我々を送り終えると「chegamos シェガモシュ（着いたよ）」。おお！懐かしい「シュ」の音だ。「シェガモス」ではない。リオでは結構「シュ」となるという。驚きとともに嬉しかった。

ポルトガルとブラジルのポルトガル語は、別の言語のように言われる時もある。そして日本のポルトガル語学の関

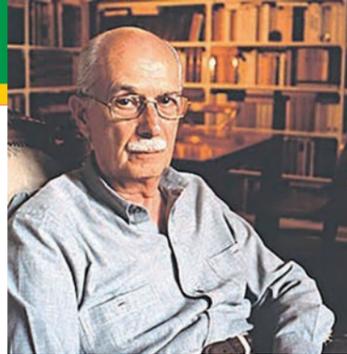
連書籍は、ブラジル式が中心だ。日系人社会やいわゆる「デカセギ」の存在、経済や人口の規模、サッカー人気などが背景だろうか。ただ、語学参考書に「ブラジル・ポルトガル語」という表現が多いのは仕方ないが、仮に「ブラジル語」という言い方があるとすれば、ポルトガル語学習者として、個人的には大いに抵抗がある。同じ「ポルトガル語圏」ではないか。「シュ」という発音も一緒だったし。

最近、大学で動詞の活用を（6通りではなく）5通り（もしくは4通りも!?!）しか覚えなかった、という話を聞き、驚いた。やはり「tu（君）」「vós（あなた達）」の活用は学んでほしい。ポルトガルでは、少なくとも親しい相手に使う「tu」は必須だった。

これまでの記者人生で微力ながら、ファドやポルトガル料理の店、カポエイラやブラジルのクラシック音楽といった話題を取り上げてきた。今後もライフワークとして、ブラジル、ポルトガル（できればアンゴラ、モザンビークといったアフリカ諸国、東ティモールも）に垣根をつくらず、「ポルトガル語圏」の話題を幅広く拾う。それを私の「路」としたい。

アントニオ・カンディド ブラジルの価値を 批判的に評価した知識人の死

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）



アントニオ・カンディド（1918～2017）

ブラジルの文学史論なり社会学をかじった人ならば、その名前は聞いた覚えがあるであろう、高名な文芸批評家アントニオ・カンディド（1918～2017）が、5月12日永眠した。享年98歳。ほぼ一世紀に及ぶ、その一生は、のちに「サンパウロ学派」と総称される、多くの左派学者・研究者との交流に彩られているため、多くの讃辞が寄せられることになる。

訃報が伝わるや、各種メディアは多くの紙面を費やしてカンディド特集記事を掲載したが、例えば、総合週刊誌ヴェージャ（5月24日号）の場合は、専属記者と大学教授という二人による長大な追悼記事は写真を含め6頁もの特別扱いだった。この記事のなかで、カンディドを「社会人類学者ジルベルト・フレイレや歴史学者セルジオ・ブアルケ・デ・オランダといった、ブラジルを調査研究し、ブラジル人とは何を意味するか、を熟考した二十世紀の論者・思想家たちの系譜に連なる最後の生き証人」と評していた。また、グローボTVの日曜朝の定番農業番組「グローボ・フルル」（5月14日）は、番組の最後で1分ほどかけて、カンディドのカイピーラといわれる内陸部小作農民層の社会学的研究を讃えながら、「本日のこの農業番組を農民文化再評価に貢献したアントニオ・カンディド先生に捧げる」と言及したのであった。これまた、特例の扱いであった。

彼の文学論はその文章があまりにも晦渋で、途中でギブアップしてしまった筆者としては、彼について語る資格はないのだが、その自覚を持ちつつ、何人も否定できないカンディドの業績・知的貢献について“ちょっと背伸びして”メモしてみよう。

まず、彼の著書といわれる『ブラジル文学の形成』（初版1959年）は、18世紀古典主義19世紀ロマン主義のブラジル文学史を批判的に論じたものだが、序章の部分は、今日の視点からみてもなんとポレミックというか独断的な文章が続いている。一つだけ引用すると、「我々のブラジル文学は、ポルトガル文学の二次的支流にして、知の庭園における雑木にすぎない。ブラジル文学は、たとえ古典的知性派文学であっても、田舎っぺ根性丸出しで均整美ゼロであることが、一目瞭然である。となれば、我々は他国の文学の経験に従属する宿命を負っているのだ」と。すなわち、ブラジル文学なんて二流どころか三流であり、フランス文学やロシア文学のようなヨーロッパの先進文学からすれば

傍流のそのまた傍流にすぎない、と何ともカゲキな論稿なのだ。

この論争誘発的文学論に比し、社会学の学位論文として書かれた『リオ・ポニートの農夫たち』（初版1964年）は、サンパウロ州内陸部から中西部にかけて広がるカイピーラと総称される、非識字者の農夫（分益小作）たちの文化・社会を社会的にケース・スタディーしたもので、この研究は、まさにセルジオ・ブアルケやジルベルト・フレイレによる革新的ブラジル社会論に連なるものだ。自給自足的経済と閉鎖的な社会関係で特徴づけられる原初のカイピーラ文化は、20世紀に入って、自給経済から資本主義経済へ移行するにつれ、文化的にも社会的にも様々な危機を経験することになるが、彼らの日常生活を表現したカイピーラ音楽がブラジルの基層文化となっていくことを明示した研究だ。カンディドは、カイピーラ音楽の発展型ともいえるセルタネージャ音楽の盛況を予想していた、ともいえるかもしれない。

年齢を重ね、成熟した思想家となった、50歳前後のカンディドの思想がわかりやすく書かれているのが、セルジオ・ブアルケの古典的名著『ブラジルのルーツ』第5版（1968年）への序文である。

「人は人生のある時期になると自己満足に陥ることなく過去を評価することが可能になる。われわれの証言は、多くの人々、いやすべての人々——一世代と呼ばれるものに属しているが故に、最初は互いに異なった存在であると考えていながら、徐々に一樣な存在となって個人として存在しなくなり、その時代の全般的な特徴の中に解消してしまう人々——そういう人々の経験の記録となるからである。従って過去を記録するということは自己を語ることではない。それは省みようとする時代のある特定の時期に、ある種の関心と世界観を等しくした人々について語ることである。」

これが書き出し部分で、そのあと、1930年革命後に噴出した「知的ラディカリズムと社会分析の息吹き」の具体例としてフレイレ『大邸宅と奴隷小屋』、ブアルケ『ブラジルのルーツ（真心と冒険）』、カイオ・ブラード『現代ブラジルの形成』の三冊を、肯定的に捉え、とりわけフレイレ本の「革命的な力と解放的な衝撃」についてわかりやすく語っている。

この文章を書いたから半世紀後、ブラジルの知性を代表する一人がまた消えてしまった。



コヘア大使、プリツカー賞審査委員に任命 ブラジル人では初の快挙

プリツカー（Pritzker）賞は「建築界のノーベル賞」として知られているが、これまでの受賞者を見ると、ブラジル人ではオスカー・ニーマイヤー、パウロ・メンデス・ダ・ローシャの二人、日本人では丹下健三、安藤忠雄、坂茂ら7名、と建築界の著名人ばかりだ。

この賞の審査委員会は8名で構成されているが、8名の審査委員の一人としてアンドレ・コヘア・ドラゴ駐日大使がノミネートされた、と5月20日に発表された。

建築関連メディアが報じたのは当然だが、フォリャ・デ・サンパウロ紙や総合週刊誌ヴェージャでも「この審査委員への任命はブラジル人では初めてであり、誇るべき快挙だ」と大きく報道されている。

コヘア大使は、リオデジャネイロ連邦大学経済学部を卒業したキャリア外交官であるが、ブラジルの

モダニズム建築史の研究者としても著名であり、『まだモダン？ 現代ブラジル建築』（2005年）、『オスカー・ニーマイヤー：その魅惑的建築』（2009年）などの著作は専門家からも高い評価を受けている。

2014年のヴェネチア・ビエンナーレ建築展では、「ブラジル：伝統としてのモダニズム」というテーマで注目を集めたブラジル館のキュレーターを務めたコヘア大使は、MoMA（ニューヨーク近代美術館）の建築委員会でも委員として長年にわたって（2005～2016）貢献しており、こうした実績が評価されたからこそ、今回のプリツカー賞審査委員へのノミネートとなった、とみられている。

ちなみに、弊誌（2016年9月号）には、コヘア大使による論稿「ブラジル近代建築を代表する4人の名匠」が掲載されているので、この機会に再読していただければ幸いです。

最近のブラジル政治経済事情（外務省中南米局提供情報並びに現地メディア報道他より）

2017年第一四半期 GDP 伸び率

6月1日発表されたIBGE（ブラジル地理統計院）の経済数値によれば、第一四半期のGDPは前期比1%プラスとなった。過去8期連続でマイナス成長だっただけに、二年ぶりにプラスに転じた。部門別でみると、農畜産部門はプラス13.4%、鉱工業部門はプラス0.9%、サービス部門0%、国内総固定資本形成はマイナス1.6%、一般家庭消費はマイナス0.1%、公共支出はマイナス0.6%、となっている。また、前年同期比では、マイナス0.4%となっており、部門別では、農畜産部門はプラス15.2%、鉱工業部門はマイナス1.1%、一般家庭消費はマイナス1.9%となっている。

政府としては、「これで景気後退は終わった」と楽観論を前面に出しているが、現在のGDPレベルは2010年の水準に戻ったに過ぎない。

ヨシアキ・ナカノFGV教授 （元サンパウロ州財務長官）のコメント

経済紙Valor Economicoに掲載された伯経済政策に関する論説記事の概要は以下の通り。

1. 2015年第4四半期末時点の通年経済成長率はマイナス

4.8%で、この時に伯の経済は底を打ったとみられる。しかしその後の回復は遅く、本年前半の成長率は、農業分野の良好な業績にも拘らず0.5%にとどまるものとみられ、依然不透明である。本年通年成長率を1%以上と見通してきた楽観論もその見直しを迫られつつある。

2. テメル大統領の就任と、財政支出抑制の議会承認は、確かに2014年以来蔓延してきた深刻なコンフィデンス危機にインパクトを与えたが、企業や消費者に広く刺激を与えるに至っていない。

(1) 失業率は依然高いレベルにあり、負債を有する消費者は可処分所得の相当部分を返済に充てている状況である。収益の薄い企業では内部留保が取り崩され、支払義務への対応に苦慮している。

(2) 社会保障改革、労働制度改革の帰趨はまだはっきりしていない。改革が必要であることに疑いはないが議会の承認は不透明である。更に、現下の厳しい財政を踏まえてその期待は減退し、新規増税論まで出てきている。

3. ポジティブな面としては、農業分野の業績が非常に良いこと、インフレが低減傾向にあること、中銀が公定金利（SELIC）を下げつつあることがあげられる。しかし、市中銀行による現在のスプレッドを考えると、SELICの低下による長期的な資本市場の活性化や投資の拡大を予想し難い。

新刊書 紹介



◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『オルフェウ・ダ・コンセイサオン』 (ヴィニシウス・チ・モライス著、福嶋伸洋訳)

ブラジルの価値の再発見とギリシャ神話を“ヴィニシウス流に混淆”して構想した戯曲が1954年に発表した本劇作品だ。1956年9月リオ市立劇場での初演は、ブラジル演劇史を画し、マルセル・カミュ監督の『黒いオルフェ』(1959年)は原作を“捻じ曲げた”との批判を招いた。もはや古典となった、このヴィニシウス流人種デモクラシー戯曲の全文を詩的にステキな日本語で読めるとは、なんととも時代の流れを感じざるを得ない。

(松籟社 2016年9月 172頁 1,600円+税)

『日系文化を編み直す』(細川周平編著)

国際日本文化研究センターにおける共同研究の成果が収録されているが、ブラジル関係では、戦前ブラジル移民の

記憶と歴史、戦前ブラジルの日本語連載小説、短命に終わったデカセギ文学、ブラジルから日本へ短歌を送ることに、ブラジル日系社会における少年スポーツの役割、日系人とマンガに関する考察、沖縄系ブラジル人というハイブリッドな主体の呪術宗教的創造、デカセギ代理店と邦字新聞社、などの事例研究が収まっている。

(ミネルヴァ書房 2017年3月 422頁 8,000円+税)

『日系ブラジル人芸術と(食人)の思想』 (都留トウヴォー恵美里著)

モデルニズモの文脈において日系芸術を把握し直す論集だ。具象画家としては半田知雄とジョルジ・モリ、抽象画家としてはマナブ・マベトトミエ・オオタケを取り上げ、第2章では、日系芸術運動の歴史的・文化的背景をフォローし、第3章では、20世紀ブラジル芸術の政治的背景と日系人画家との関係を分析し、第4章では、モデルニズモの“闘争宣言”というべきアンドラーデ『食人宣言』の日系芸術へのインパクトを考察している。

(三元社 2017年3月 242頁 4,200円+税)

『レヴィ=ストロース論集成』

(川田順造著)

構造人類学の泰斗について愛弟子が長年にわたって論じた文章を集成したもの。ブラジルに関しては、二十二年のうちに(レヴィ=ストロースにきく)、『悲しき熱帯』のいま、写真集『ブラジルへの郷愁』をめぐって、なぜ熱帯は今も悲しいのか、などの論稿が収められている。恩師を語っている文章が、『悲しき熱帯』を全訳した川田教授のブラジル論にもなっていて、その読みの深さには感心させられる。

(青土社 2017年4月 288頁 2,600円+税)

『悪いけれど、日本人じゃないの』 (日向ノエミア著)

『ローマ字ポ和辞典』、『ローマ字和ポ辞典』を編纂し、長年にわたってポルトガル語教育に携わってきた著者(日系二世)による経験知に基づく日伯比較エッセイ集。もともとフランス演劇や能を専攻した比較文学研究者であるだけに、様々な実体験エピソードの単なる列記に終わらず、文学や劇作品にさりげなくふれながら、素敵な文章を紡ぎ出している。本書の刊行は4年前だが、ポルトガル語版がこのほど出版された。

(柏書房 2013年5月 276頁 2,200円+税)

!!「びっくり豆知識」!!

国家にとって「最適人口」とは

「びっくり」しないでほしい。ブラジルが中国と同じ高齢化社会の入り口に首を突っ込んでしまったようだ。合計特殊出生率(1人の女性が生む子供数による計算)は下がってはいるが、現在2億人の人口は1%程度伸び続ける。2050年時点でも世界7位(現在は5位)は維持しそだが、この“年寄り大国”を褒めていいのか悪いのか。

出生率の高い順に世界をながめると、2014年はアフリカ勢がニジェールの7.5を筆頭に上位50位の大半を独占、ブラジルは136位の1.79である。この水準は130位の米国(1.86)や154位の中国(1.56)、172位の日本(1.42)と大差はない。

ブラジルの場合、高齢化、少子化の速度が予想を超えている。1980年の出生率は4.07、90年は2.81、そして06年は1.8まで下がった。1%台の数字についてブラジル側は「2043年には…」と予測していた。しかし見通しは外れ25年も早まってしまった。

日本については5月末発表の最新数字によると、16年に生まれた子供の数が約97万人となり、1899年の調査開始以来初めて100万人を割り込んだ。このまま推移すると2065年の日本の人口は8800万人程度まで減る見通しだ。

世界の総人口は50年には90億人とされていて、現段階では75億人に迫る勢いだ。人口が増える国の95%以上は途上国だが、先進国も米国、英国などが増加、ブラジルも徐々に増え続ける。対照的に人口が減り始めた国は日本を筆頭に、スペイン、ポルトガルなど15カ国を数える。

ブラジルは人口構成では先進国の仲間入りをしたのかもしれない。平均寿命は75歳近くまで上昇、高齢者が急増する。国民の半分が「貧乏人の子沢山」を脱出し、これからリッチな生活を求め始める。女性の社会進出が進めば、少子化は避けられない。

コヘア駐日ブラジル大使は講演で、「フランスの人口はナポレオン時代から2倍になるのに200年かかった。ブラジルは戦後だけで5倍になった」とブラジルの潜在力を強調した。確かにそういう側面はあるが、今度は政府が人口を支える公的支援や年金改革の責務を負う。

日本の人口は明治以降でおよそ4倍になった。増えた国民が国力を引き上げ、次世代に託してきた。だが、難問がある。増えてもいいが増えすぎると困る。国家にとっての「最適人口」とは何か、が問われている。(W)

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。

BrAsia(ブレイジア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。

「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia(ブレイジア) 運営:株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

協会イベントのご案内

参加のお申し込みは、協会HP
お申し込みフォームにてお願いします

7/13 講演会
講演者: 竹下幸治郎 JETRO 海外調査部中南米主幹
演題: ブラジル経済と事業環境の変化を展望する

6月9日 ブラジルの高等選挙裁判所の審判によりテメル大統領は失職を免れましたが、議会の支持の弱まるテメル大統領が失職しないことで、却って、年金改革の方向は不透明感を増し、またレアルも下落するなど、ブラジルの政治経済情勢は、相変わらず、混沌としています。PSDB 党が連立与党に残ることは発表されましたが、残念ながら、今後の見通しが不透明な状況が早期に変わる見込みはなさそうです。そのような状況下、JETROの中南米の専門家である竹下主幹にブラジル経済と事業環境の変化を展望してもらいます。

日時: 2017年7月13日(木) 15:00-16:30
講演者: 竹下幸治郎 JETRO 海外調査部中南米主幹
演題: ブラジル経済と事業環境の変化を展望する
会場: フォーリン・プレスセンター 会見室
住所: 千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンター 6階

広告掲載企業募集中!!

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」又はホームページへのバナー広告の掲載企業を募集しております。広告掲載にご興味のある企業は、協会事務局までご連絡下さい。(メールアドレス: info@nipo-brasil.org)

日本ブラジル中央協会ホームページ
<http://nipo-brasil.org/>



— 皆様のご入会、心よりお待ちしております —

法人・個人 新規会員募集中

会員数 2017年6月現在
法人会員 118社
個人会員 290名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、有効関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)



スペイン・中南米との架け橋として20年
スペイン語・ポルトガル語の イスパニカ

www.hispanica.org

ことばを学ぶ人にも、ビジネスマンにも、高品質で充実のサービスを提供いたします

通訳 翻訳

ビジネスから文芸まで経験豊富なプロがクオリティの高いサービスを提供

取扱い言語：スペイン語・ポルトガル語
 英語・フランス語・ドイツ語
 イタリア語・ポーランド語

語学スクール

初心者はもちろん、中・上級者向けコースも充実の溜池山王教室

www.hispanica-academia.org

- ・通学
- ・通信添削
- ・オンライン※ポルトガル語は通学のみ

書籍の執筆・編集

赴任、出張にはこれ！

安心のカナ発音
 英語付き。



スペイン語
**ビジネス会話
 フレーズ辞典**
 スペイン語圏での
 ビジネスシーンで
 役に立つ用例を場面別に
約2400掲載
 ビジネス文書例も充実！



ブラジル・
 ポルトガル語
**ビジネス会話
 フレーズ辞典**
 約2200掲載
 ビジネス文書例も充実！
 ミニマム文法やミニ辞
 典も掲載。
 三修社刊

中南米の情報提供

スペイン通信社EFEの情報をもとに
 中南米の最新ニュースを日本語で

- ・中南米経済速報 (週刊)
- ・政治・治安情報"CRONICA"
 (月～金の毎日)

企業語学研修

ニーズに合わせた効果的な研修

粒ぞろいの講師が、ビジネスを成功に
 導く語学力習得をとことんサポート。実
 践的なコミュニケーション力を最大限ひ
 きだすレッスンをアレンジします。

(有)イスパニカ 〒107-0052 東京都港区赤坂 2-2-19 アドレスビル 1F (銀座線・南北線「溜池山王」8番 駅出口前)

Tel.03-5544-8335 Fax.03-5544-8336 hola@hispanica.org



BRASILICAGRILL
 CHURRASCARIA

**ブラジル パーベキュー食べ放題
 + ビュッフェ**

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL YOU CAN EAT | **食べ放題**

予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
 Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

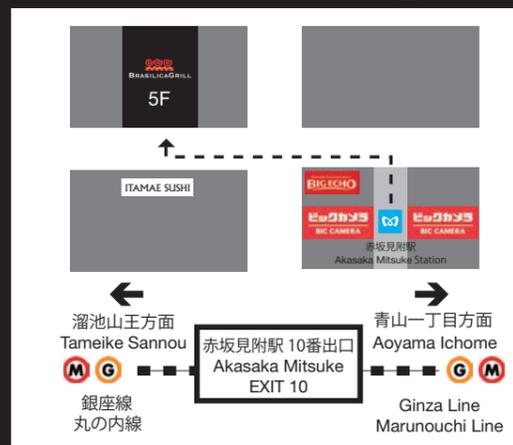
赤坂見附駅
 徒歩2分



赤坂駅
 徒歩6分



永田町駅
 徒歩6分



南米へのフライトも ずっと心地よく。



こだわりの機内食に、2,500を越えるエンターテインメント・チャンネルを楽しまれた後は、広々としたシートをベッドポジションにしてゆったりお休みください。トバイでのお乗り継ぎはスムーズでスピーディ。トバイ空港でお荷物の預け替えをしたり、チェックインカウンターにお立ち寄りいただく必要がなく、荷物は最終目的地で受け取るだけ。ご到着まで快適にお過ごしいただき、リフレッシュして次のビジネスへ。南米3都市へのご予約は emirates.com/jp で。

サンパウロ | リオデジャネイロ | ブエノスアイレス

エミレーツ・ビジネス

Hello Tomorrow Emirates



鉄は金属の王なる哉

鉄は文明を開き、社会を支え、そして未来を築くためになくてはならない素材です。
新日鉄住金は世界最高の技術とものづくりの力で鉄の可能性を極限まで追求し、
“総合力世界No.1の鉄鋼メーカー”をめざしています。
だからこそ私たちは、「鉄」の文字の意味合いを「金属の王なる哉」と受けとめ、
総合力世界No.1への意志と誇りをこめて社名ロゴに使用しています。